

英語スピーキングの流暢さを向上させる small talk

所属コース	教科領域コース
氏名	大野 慶太郎
指導教員	池野 修・立松 大祐

【概要】

文部科学省(2019)では、「やり取り」及び「即興性」を重視した言語活動の機会が不足していることが指摘されており、授業では生徒が英語を用いてやり取りまたは発表をする機会を増やすことが求められている。さらに、グローバル化によって英語を用いたコミュニケーションの機会が増えており、より一層英語スピーキング能力が重視されるようになってきている。

本研究は small talk による生徒の流暢さの向上を調査することを目的としており、流暢さの指標として1分間あたりの発話語数、ポーズ数の回数を用いている。task repetition 形式で2つの話題を用いた1分間チャット及び1分間スピーチを実施した。活動ごとに自己評価や言えなかった表現の記録を行い、生徒が主体的に活動を振り返る時間を設けた。言えなかった表現は次の活動の最初に例を示して生徒と共有している。このように活動のフィードバックを実施することで言えなかった表現を会話中で用いられるようになり、流暢さの向上に繋がると考える。活動の前後で事前テスト及び事後テストを実施しており、1分間あたりの単語数及びポーズ数の変化を分析、考察している。今回の実践では7人中5人に単語数の増加が見られた。また、ポーズ数も7人中5人に減少が見られた。

キーワード small talk, 流暢さ, task repetition

1. はじめに

グローバル化により、社会における英語の需要はますます高まっている。特に、スピーキング能力がより一層求められるようになってきている。「高等学校学習指導要領外国語編」(文部科学省, 2019, p.6)では、高等学校の授業で「やり取り」及び「即興性」を重視した言語活動が不十分であると指摘されており、スピーキングの指導が必要であると記されている。学習指導要領の改訂に伴い、チャット活動等、生徒の英語によるやり取りまたは発表を目的とした活動が頻繁に見られるようになってきている。

英語スピーキングにおける形式の正確さの向上を目的とした実践事例は多々報告されており、文法学習後にその文法を用いたコミュニケーション活動を実施している指導や帯活動としての実施が多く見られる。一方、流暢さに焦点を当てた実践は正確さに比べて少ないと言える。しかし、スピーキングにおいて流暢さは正確さと同等に重要であると考えられる。文部科学省(2014)では、高等学校における改善の方向として英語話者とある程度流暢にやりとりができる能力を養うことを挙げており、流暢さを重視していることがうかがえる。したがって、流暢さの向上に焦点を当てた実践が求められていると言える。

2. 先行研究

先行研究は、やり取り及び発表の実践報告と流暢さの指標を示した研究に分類される。実践報告では同じタスクを繰り返す形式で実践を行った千菊(2018)の研究が挙げられる。

ストーリーリテリングを中心とした同じタスクを繰り返すスピーキング指導を実施したグループと同じタスクを繰り返す指導法でリスニング指導を実施したグループの1分間あたりの発話語数を指導前後で比較しており、スピーキング指導を実施したグループの方に1分間あたりの発話語数においてより流暢さの向上が見られたことが明らかにされている。また、江口・田村(2018)の実践も報告されている。この研究では大学生85名を対象に教科書を用いた前単元の語彙の定着を目的とした小テスト、本単元のリーディング、リスニング等を15回にわたって実施している。指導の前後で英検準2級二次試験の問題を用いた事前テスト及び事後テストを実施しており、30秒あたりの発話語数の変化を比較している。指導の結果、分析可能だった58名のうち43名が30秒間あたりにおける発話語が増加している。

流暢さの指標では田島(2005)の研究が挙げられる。韓国の大学及びアメリカの大学で日本語を学んでいる83名の学習者を対象にモノログ型のタスクを実施、録音し、そのデータを基に発話速度及びポーズ頻度を算出している。さらに、録音データを二者の5段階評定によって評価し、二者の平均値を主観評定として算出している。そして、発話速度及びポーズ数と流暢さにおける主観評定の相関を調査し、発話速度が流暢さの指標として妥当であると結論付けている。

3. 研究の目的及び方法

本研究は、small talk の実践によって英語スピーキングの流暢さを向上させることを目的としている。本研究では流暢さを第二言語習得に関する用語集(2009)を基に「自然で滑らかに目標言語を話したり、書いたりできる状態の程度」と定義している。小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック(2017)によると、small talk は「2時間に1回程度、帯活動で、あるテーマのもと、指導者のまとまった話を聞いたり、ペアで自分の考えや気持ちを伝え合ったりすることである。」と定義されている。しかし、本研究ではsmall talk を「生徒が英語を用いたやり取り及び発表を複数回繰り返し、短時間で行う活動」と定義しており、1分間チャット及び1分間スピーチから構成されている。

実践では生徒にとって身近だと考えられる2つの話題を用いており、本多(2020)を参考にtask repetition形式の活動を取り入れている。本研究ではtask repetitionを「同じタスクを複数回繰り返して行う指導法」と定義し、英語を用いたやり取り及び発表の練習をさせるため、両方の話題で1分間スピーチを3回、1分間チャットを1回実施した。活動前にはメモ用のワークシート(資料1参照)を配布し、意見や考えを整理する時間を3分間設けている。また、活動後には毎時間自己評価シート(資料2参照)の記入による自己省察の時間を設けている。4件法及び自由記述形式をとっており、4件法は「4 できた」「3 ややできた」「2 あまりできなかった」「1 できなかった」となっている。さらに、活動中に用いることができる表現を増やすことを目的とした「言えなかった表現」シート(資料3参照)及びuseful expressions シート(資料4参照)を用いている。「言えなかった表現」シートは活動ごとに生徒に日本語で記入をしてもらい、2時間ごとに回収をしている。回収した次の活動で生徒と表現例を共有している。useful expressions シートは相槌等の話題を問わず使用できると考え

られる表現及び話題に特化した表現例を示している。メモの作成前に生徒に配布しており、考えや意見をまとめる際の補助となるようにしている。

流暢さの変化を確認するために1分間スピーチ形式の事前テスト及び事後テストを行い、指導の前後における1分間あたりの発話語数と1分間あたりの間の回数をタブレット端末で録画した映像を基に比較した。さらに、事後テスト後に活動全体についての評価(表3参照)を行っており、本研究の工夫に対する生徒の認識を調査した。4件法と自由記述を組み合わせており、4件法は活動ごとの自己評価と同様に「4 できた」「3 ややできた」「2 あまりできなかった」「1 できなかった」となっている。

4. 研究詳細

本研究はA 高等学校第2 学年総合英語受講者7名を対象に、令和3年11月10日から12月15日までの水曜日第3校時及び4校時の前半または後半に10～15分程度で実践を行い、同日に2回の実践を行った。実践では生徒にとって身近な話題であると考えられる“*What is your favorite subject?*”と“*Students may use their own smartphones at school.*”の2つを用いた。また、事前テスト及び事後テストでは“*What do you do when you are free?*”を用いた。1テーマの実施内容は以下のとおりである。

表1 small talk(1テーマ分)

1時間目	2時間目	3時間目	4時間目
<ul style="list-style-type: none"> ・チャット活動 ・メモの作成 ・useful expressionsの導入・練習 ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・チャット活動 ・メモの作成 ・言えなかった表現の共有 ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・チャット活動 ・メモの作成 ・振り返り 	<ul style="list-style-type: none"> ・1分間スピーチ ・メモの作成 ・言えなかった表現の共有 ・振り返り

実践前に事前テストを実施しており、事前テストを実施した同日に“*What is your favorite subject?*”を用いた1時間目のチャット活動を実施した。事後テストは“*Students may use their own smartphones at school.*”を用いた1分間スピーチの実施と同日に実施し、事後テストの後に活動全体の振り返りを実施した。事前テスト及び事後テストでもメモの作成による考えをまとめる時間を設けている。

5. 実践結果と考察

5-1. 映像記録分析

タブレット端末を用いて事前テスト及び事後テストの1分間スピーチを録画し、1分間あたりの発話語数及び間の数を指導の前後で比較した。結果は以下の通りとなった。なお、1分間あたりのポーズ数は鈴木(2014)の研究で引用されているRasinski(2003)の指標を用いており、3秒以上の沈黙をポーズ数とみなしている。

表 2 指導前後の流暢さの変化

生徒	1分間の発話語数		変化	1分間のポーズ数		変化
	指導前	指導後		指導前	指導後	
生徒 A	23	71	↑48	3	2	↓1
生徒 B	38	54	↑16	1	1	変化なし
生徒 C	45	42	↓3	4	2	↓2
生徒 D	22	43	↑21	2	1	↓1
生徒 E	38	35	↓3	3	1	↓2
生徒 F	38	54	↑16	2	4	↑2
生徒 G	42	86	↑44	3	2	↓1

1分間の発話語数は、7人中5人が増加した。事前テストでは1分間話し続けることができない生徒が大半であり、20～40語程度だった。一方、事後テストでは1分間話し続けられた生徒が多く見られ、発話語数が増加した生徒が多かった。しかし、発話語数が減少した生徒も2人見られた。1分間あたりの間の数は、7人中5人が減少した。一方、変化のない生徒や増加した生徒も見られた。効果があまり見られなかった生徒も見られたが、上記の結果によって small talk の実践によって英語スピーキングの流暢さは向上することが明らかとなった。

発話語数の向上及びポーズ数の減少が見られなかった原因として即興性を重視した指導が不十分だったことが考えられる。今回の実践ではメモに書かれている内容を基に活動を実施した。メモの内容を全て言い終えた後に話す内容が思いつかず、間が空いてしまう場面が見られた。また、メモの内容に新たな内容を付け加えて即興で述べようとしている生徒も見られたが、言いたいことを英語で表現することに苦心している様子が窺えた。単語単位でメモを作成させ、単語を基に文を考えて話す練習など即興性を重視した活動の実施が求められると考えられる。また、「言えなかった表現」及び *useful expressions* の練習時間が非常に短く、会話中で用いることが困難だったと考えられる。したがって、表現の意味や使用場面等を示しながら口頭練習をより丁寧に実施する必要があると言える。

5-2. 事後評価分析

事後テスト後に活動全体の自己評価を行い、実践に対する生徒の認識を調査した。以下に、生徒の事後評価の結果を示す。

表 3 small talk に対する生徒の認識 (回答者数 7人)

番号	質問項目	4件法			
		1	2	3	4
1	話したことがあるテーマについて以前よりも流暢に話せるようになった。	0	0	1	6
2	話したことがないテーマでも以前より流暢に話せると思う。	0	0	6	1

3	同じ話題で3回話すことでそのテーマについて以前よりも流暢に話せるようになった。	0	1	3	3
4	1分間スピーチを行うことで自分の意見・考えを伝えやすくなった。	0	0	3	4
5	自己評価シートによって、話すときの留意点を意識できるようになった。	0	1	2	4
6	「言えなかった表現」の共有によってよりそのテーマについて話しやすくなった。	0	0	3	4
7	useful expressions 1, 2は会話の継続に役立った。	0	1	4	2

流暢さの向上に関する質問 1, 2 は全員が 4 または 3 を選んでおり、small talk の実践によって流暢さが向上したと認識していると言える。1 分間スピーチの有効性に関する質問 4 でも全員が 4 または 3 を選んでおり、1 分間スピーチの有効性を強く認識していることが窺える。指導の工夫の有効性を問う質問 3, 5, 6, 7 より、全体的に指導の工夫点である task repetition, 自己評価, 「言えなかった表現」の共有及び useful expressions の有効性を強く認識していると言える。

しかし、「言えなかった表現」の共有以外の項目では 2 を選んでいる生徒が 1 人見られる結果となった。理由として、実践回数の少なさ及び実践期間の短さが挙げられる。今回の実践は約 1 ヶ月間の実践であり、時間が十分ではなかった。データ収集をすることを第一に考えており、会話の中で useful expressions を使用できるように表現の共有を行うという目的を見失っていた。そのため、会話でそれらの表現を用いることが困難であり、生徒が指導上の工夫を十分に実感できなかつたと考えられる。自己評価については生徒への共有方法が適切ではなかった。実践ではその日の活動で用いる自己評価シートの評価項目を目標として生徒に示し、メモの作成及びスピーキング活動を行っていた。目標の共有は実践の最初のみ行っており、パワーポイントに示してある目標を読み上げるだけであり、生徒が目標を意識しながらスピーキング活動を行うことが困難だったと考えられる。したがって、生徒の活動前に再度目標を確認する・目標達成のために意識すべきことを示す等、活動中も目標を意識できるような生徒への働きかけが必要である。さらに、生徒の自己評価にフィードバックを行わなかったことも原因である。特に、自由記述の内容を共有することで自分自身の活動の様子をより客観的に振り返ることが可能であり、活動に反映しやすくなると考えられる。

5-3. 自由記述分析

事後テスト後の自己評価では、「1 分間は思ったよりも長かったです。」「間を空けずに話すことが難しかったです。」「相手のことを知ることができて楽しかったです。」という旨の記述が多く見られた。これらの記述により、small talk の活動において継続して話し続けること及び即興でやり取りを行うことを特に難しいと感じている生徒が多いことが明らかになった。一方、small talk の活動を肯定的に捉えている生徒が居ることも明らかとなった。

上記の記述以外にも「少しずつ時間を延ばして活動を行っていきたいです。」「会話を楽しむことができました。」という旨の記述もあり、small talk 活動に対する意欲の向上が見受けられた。

6. 今後の課題

今後の課題として、以下の点が考えられる。まず、より多くの人数を対象とした指導を実践することである。今回の実践では A 高等学校の総合英語受講者 7 名を対象に指導を実施し、1 クラスを対象とした指導を実施していない。したがって、1 クラスの生徒を対象とした small talk の指導を実施して比較及び分析を行うことが求められると言える。また、年間指導計画を基に教科書の内容を用いた small talk や新出事項の使用を目的とした small talk を長期にわたって実践する必要がある。次に、即興性を重視した指導が挙げられる。前述のようにメモを基に活動をしており、メモの内容を全て話し終わった後に即興で会話を続けることが困難であるとうかがえた。今後は、長期にわたる指導を行う際に生徒のスピーキング能力を考慮した段階的な指導を実施し、徐々に即興で話せる量を増やしていくべきであると考えられる。最後に、生徒にとって身近ではないテーマを用いた small talk の指導を実施する必要がある。生徒にとって身近なテーマのみを用いた指導ではスピーキング能力の向上に限界があると考えられる。したがって、身近なテーマ及び身近ではないテーマの両方を用いることでスピーキング能力のさらなる向上が見込めると考える。

7. まとめ

本研究では英語スピーキングにおける流暢さの向上に焦点を当てた。流暢さの指標である 1 分間あたりの発話語数及びポーズ数は両方で 7 人中 5 人に改善が見られた。この結果から、small talk によって流暢さは向上することが明らかとなった。一方、メモを見ながら活動を行っていた生徒もおり、発話語数及びポーズ数の改善に影響している可能性は否めない。今後はさらに即興性を重視した small talk の指導を実施し、small talk による流暢さの向上をより正確に検証する必要がある。また、複雑さや正確さも流暢さと同様に英語スピーキングでは重要であることを忘れてはならない。したがって、流暢さだけでなく複雑さや正確さの向上を目的とした指導も実施していく必要がある。

引用・参考文献

- 江口朗子・田村祐(2018). タスク性の高いコミュニケーション活動における発話の流暢さの発達 —大学初級レベルの英語学習者を対象とした実践研究— 中部地区英語教育学会紀要, 47, 119-126.
- 鈴木政浩(2014). 英語音読評価項目と熟達度の関係 (パイロットスタディー) 西武文理大学サービス経営学部研究紀要, 25, 3-10.
- 千菊基司(2018). タスクの繰り返しを中心としたスピーキング指導と高校生の英語発話の質の向上 日本教科教育学会誌, 40, 25-37.
- 田島ますみ(2005). 流暢さを表す指標について—発話速度とポーズ頻度— 中央学院大学人間・自然論叢, 21, 133-155.
- 筑波大学(2009). 第二言語習得に関する用語集
<https://www.u.tsukuba.ac.jp/~ushiro.yuji.gn/Publishing/SLAglossary.htm> (最終アクセス日 2022 年 2 月 11 日)
- 本多敏幸(2020). 中学校の先生にオススメ「話す力」を高めるスピーキング活動～新学習指導要領の実施に向けて～ 教育出版

文部科学省(2014). 今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm (最終アクセス日 2022 年 2 月 11 日)

文部科学省(2017). 小学校外国語活動・外国語 研修ガイドブック 旺文社

文部科学省(2019). 高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 外国語編 英語編 開隆堂出版

謝辞

本研究を行うにあたって手厚くご指導いただいた池野修先生, 立松大祐先生に深くお礼申し上げます。また, お忙しい中, 実践にご協力いただいた A 高等学校の生徒, 教職員の皆様に深くお礼申し上げます。

実践資料

資料 1 メモ用ワークシート

Class_____ Number_____ Name_____
What do you do when you are free?
Memo(write in English)
<div style="border: 1px solid black; height: 150px; width: 100%;"></div>

資料2 自己評価シート項目

評価項目		
テーマ1		
1回目	1分間英語で会話を続けることができた。	4 3 2 1
	2文以上で理由を付けて話すようにした。	4 3 2 1
2回目	ペアの人の発言に対して、必要な情報を確認するために質問できた。	4 3 2 1
	「言えなかった表現」を用いてやり取りを1分間続けることができた。	4 3 2 1
3回目	1回目及び2回目よりも沈黙することなく英語で1分間やり取りを続けることができた。	4 3 2 1
	準備していた内容に新しい内容を付け加えてペアの人に伝えられた。	4 3 2 1
4回目	間を空けずに話すことができた。	4 3 2 1
	メモに書いていない内容を付け加えて発表できた。	4 3 2 1
テーマ2		
1回目	1分間英語で会話を続けることができた。	4 3 2 1
	自分の立場を明確に示すことができた。	4 3 2 1
2回目	ペアの人の意見に対して、同意・反対の表現を用いて反応することができた。	4 3 2 1
	「言えなかった表現」を用いてやり取りを1分間続けることができた。	4 3 2 1
3回目	1回目及び2回目よりも沈黙することなく英語で1分間やり取りを続けることができた。	4 3 2 1
	ペアの人の意見を聞き、新しい意見を述べることができた。	4 3 2 1
4回目	沈黙することなく1分間発表することができた。	4 3 2 1
	自分の立場を明確にし、その理由を3文以上付け加えて話すことができた。	4 3 2 1
※上記の質問事項に加え、活動で出来たこと及び次回の目標に関する自由記述欄を設けている。		

資料3 「言えなかった表現」シート

Date	Japanese	English
11月10日		
11月17日		
12月1日		
12月8日		
12月15日		

英語スピーキングの流暢さを向上させる small talk

資料 4 useful expressions シート

useful expressions 1

使用目的	English	Japanese
相手の発言に 反応する	Great!	すごい!
	Nice! / Sounds good!	いいね!
	I see. / I got it.	分かった。
	You too?	あなたも?
	That's too bad.	残念でしたね。
間を持たせる	Let me see... / Well...	ええと…
会話を 広げる	For example?	例えば?
	Why?	なぜ?
	How about you?	あなたはどうか?
	Please tell me more.	もっと教えてください。
会話を終える	Nice talking to you.	お話しできて嬉しかったです。

useful expressions 2

Topic	Favorite Subject	English	Japanese
		I like ○○ better than △△. I prefer ○○ to △△.	私は○○が△△よりも 好きです。
		I like ○○, too.	私は○○も好きです。
		I'm good at it.	私はその科目が得意です。
		Why do you like it?	なぜその科目が 好きなのですか?
		I'm interested in ○○.	私は○○に興味があります。
		I study ○○ ▲▲ days a week.	私は週に▲▲日 ○○を勉強します。
		Will you tell me how to study ○○?	○○の勉強方法を 教えてくださいませんか?